



第37回日本診療放射線技師学術大会
第23回アジアオーストラレーシア地域診療放射線技師学術大会 (23rd AACRT)
第28回東アジア学術交流大会 (28th EACRT)



最終回 東京への道 Go To TOKYO



大会長 篠原 健一

(公益社団法人東京都診療放射線技師会 会長)



昨年のNetwork Now12月号から連載してきた「東京への道 Go To TOKYO」ですが、一年がたつのは早いもので、いよいよ学術大会開催月（最終回）となりました。

第1回では、会場のビッグサイト、日本の食・風景・名所などの画像を配しました。第2回以降、実行委員長など大会役員、東西に長い東京に配置する東京都診療放射線技師会の5つの支部（16の地域）ごとに、いろいろな場所や歴史を紹介してまいりました。最終回では、本会（事務所＝研修センター）のある荒川区に絡めてみたいと思います。

実は「荒川区」に荒川は流れていません。厳密には“今は”です。区の北側と東側の境に接して流れる隅田川が、以前は「荒川」と呼ばれていたことに由来します。明治末期から昭和初期にかけて、岩淵水門（東京都北区）から東京湾河口までの荒川放水路が建設され、こちらが荒川本流と呼ばれるようになりました。ドラマで金八先生が河川敷を闊歩しているところです。以来、岩淵水門から下流の旧荒川は「隅田川」に改称され、放水路は下町を洪水から守ってきました。



出典：「国土交通省関東地方整備局 荒川下流河川事務所」

現在の岩淵水門は、隅田川の水位が4メートルに達すると自動的に閉じる仕組みだそうです。ちなみに、旧岩淵水門（赤門）の手前に電柱のようなものがあり、過去の洪水の水位を表示しています。1947（昭和22）年のカスリーン台風（8.60m）、1958（昭和33）年の狩野川台風（7.48m）などが記録されています。放水路がなく、水門を閉じることができなければ、東京の下町は甚大な被害を受けたことでしょう。

この荒川放水路開削工事を指揮したのは、青山士という人で、かのパナマ運河建設に携わった唯一の日本人だということです。青山氏はパナマから帰国後、内務省に採用され、荒川改修および放水路開削工事の責任者として荒川放水路を建設しました。工事完成後には青山氏および工事関係者一同が、工事の犠牲者を弔うために資金を出し合って荒川放水路完成記念碑を岩淵水門のそばに建てましたが、そこには以下の言葉が記されています。

「此ノ工事ノ完成ニアタリ多大ナル犠牲ト労役トヲ払ヒタル 我等ノ仲間ヲ記憶センカ爲ニ」

この碑には青山氏の名前は刻まれていません。放水路は関係者全員による努力の結果完成したものであり、特定の個人の名前を記念碑に記すべきではないとする氏の思想が明確に示されているそうです。

青山氏は、「私はこの世を、私が生まれたときよりもより良くして残したい」と、生前よく語っていたといえます。

今学術大会も、何か一つでも今までにない今後のために役立つことがあれば幸いです。



出典：「土木学会図書館 青山士 略歴及び著書・論文」



出典：「近代史跡・戦跡紀行～慰霊巡拝 旧岩淵水門（赤水門）」

